

# 田口卯吉と『日本開化小史』I

岩 崎 允 胤

## 目 次

1	生涯と学問	1
2	『日本開化小史』の特徴	8
(1)	史論体、開化史体の書であること	9
(2)	史観の特徴	11
①	唯物論的な傾向	11
②	社会・歴史の進歩という視点	14
③	社会・歴史の理という視点	16
付論	功利主義的倫理説（本号はここまで）	18
3	同書における重要な論点	
(1)	古代における宗教的意識の発生と発展	
(2)	中世における支配階級間の抗争による人民の苦難	
	——南北朝期から応仁の乱を経て戦国時代まで——	

(3) 近世の封建制度

——封建の社会に適合する開化について——

(4) 幕藩体制の崩壊とその理

(5) 卯吉の史観についての補説

① 封建制度のもとでの開化の適合的な性格という視点

② 戦争による人間らしい生活の蹂躪という視点

③ 資本主義的なものと半封建的なものとの競合

## 要旨

明治初期に登場し、日露戦争の頃まで活動し、自由主義的経済学者、実業家、歴史学者として知られる田口卯吉について、その著書『日本開化小史』の思想内容を検討した。本稿でとりあつかう諸論点は、右に掲げた目次に示されている。なお、本稿は、わたくしによる『日本近代思想史研究』の一環となる。

キーワード 史論体・開化史体、文明史観、社会・歴史の進歩、功利主義的倫理

## 1 生涯と学問<sup>①</sup>

田口卯吉(一八五五—一九〇五年)は、イギリス・マンチェスター学派の自由主義的経済思想——その自由放任・自由貿易の論——と、啓蒙的な文明史観とをもって明治初期に登場し、早々と注目すべき足跡を残した。その頃のかれの思想的立場は、一言でいうとすれば、文明開化主義、功利主義、平民主義、自由民権主義、社

会改良主義とみることができらう。明治十一（一八七八）年には沼間守一の主宰する嚶明社に参加し、自由民権運動に先駆けており、当時のかれのかなり急進ブルジョアジ的な姿勢をうかがうことができる。『日本開化小史』はこの前後の時期に書かれたものである。

田口は、安政二年、江戸で幕府の徒士の家に生を享けた。その年は、幕府がペリーと和親条約を結んだ翌年にあたる。母方の曾祖父は碩儒佐藤一斎である。五歳のとき父を失い、その後、幕臣木村熊二に嫁いでいた姉鏡子のもとで育てられたが、十四歳の年、明治戊辰戦争のために一家は困窮し、姉もその頃行商をして口を糊さねばならなかったらしい。卯吉は、隣りに住む乙骨太郎乙の世話によって、貿易で賑わう横浜の小間物屋の骨董屋で働くなど、しばらく苦勞を重ねたが、その間この地で外国人と接触する機会をもったばかりでなく、アメリカの宣教師に英語を学ぶこともできた。

\* この姉、鏡子は、その後、先駆的な女性活動家となり、アメリカ遊学の経験をもつ夫熊二とともに明治女学校を創設し、校長も務め、近代女子教育の発展に貢献した。また、彼女の夫は、鏡子の没後、教会の牧師をすかたわら、のちに高名な政治家となる高橋是清が、まだ若くて校長をつとめていた神田の共立学校で、島崎藤村にアーヴィングの『スケッチ・ブック』を教えており、藤村はこの熊一の宅に寄寓し、熊一から洗礼をうけている。卯吉とかれの周辺の人々とのあいだには多彩な人的な繋がりがあり、興味ぶかい。

明治二（一八六九）年に静岡の藩に封ぜられた徳川家のもとで勝海舟の創設した沼津兵学校の教官に招かれた英学者乙骨は、聡明な少年卯吉を自宅に呼びよせ、そこからこの兵学校に通わせ、家塾ではみずから英語を、また同僚中根淑（香亭）の塾で漢書を学ばせた。この中根は、のちに金港堂で出版業に携り、二葉亭四迷の『浮雲』を世に出した人物である。かれは、明治十五年、卯吉の『日本開化小史』完結のみぎり、かつての愛弟子のために「跋」の筆をとり、次のように書いている（Ⅱの一六ページ）。

明治復讐、百度(あらゆる)制度・規則皆新。天下之事、率取法於西國焉。蜀史籍之體、全然仍舊貫(旧慣)。雖浩何補。吾友鼎軒田口君、夙通經濟之學、觀史有別眼。嘗慨古今史乘之無益世道、倣西國開化史、著此編、以論我國文物之所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>旺<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>焉。其博識卓見、非尋常史家之所<sub>レ</sub>及也、嗚呼此編也、僅々數卷耳。不可謂浩也。然擴而充之、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>壓<sub>レ</sub>倒<sub>レ</sub>萬卷矣、可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>濟<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>天下<sub>レ</sub>焉。蓋以其平素所蘊蓄者、溢而爲史也。然則觀斯書者、謂君善以學成史、則可。謂君善以史成學、則不可。

\* 田口卯吉は、その他乙骨に結婚の媒酌をしてもらうなど、恩恵を蒙ることが多かったが、のちにこんどは乙骨の甥にあたる上田敏が父を失ったとき、卯吉は十六歳のこの少年を自宅に引きとり、その豊かな成長をみまもりながら面倒をみた。

静岡の出身で、乙骨の友人であり、つとに卯吉の義兄、熊二とともにイギリスに遊学し、のちに日本の学術・文化の発展に大きく寄与した外山正一(一八四八—一九〇〇年)は、その頃しばしば沼津の乙骨家を訪ねており、卯吉は数歳年上の外山とそこで知り合い、親交を結ぶこととなった。明治四年の廢藩置縣ののち、卯吉は東京に出て、英語を初めとし医学の修得にも努めたが、とくに経済学の研究を本格的に志すようになった。また歴史の勉強もした。その後大蔵省(翻訳局)に入り、新聞に投書して急進的な立場から民権論を唱えたりしたが、一八七八(明治十一年)年にはそこを辞任した。そして、二十一歳年長の福沢諭吉の助力を受けて、翌年から『東京經濟雜誌』を、さらに九一年には史学雑誌『史海』を、みずから手で発刊するなど、広い視野から学問と思想の発展のために貢献した。官学的な国史学派の著名な歴史学者である黒板勝美も、昭和の初め、すなわち一九二七年に、『田口卯吉全集』第一巻冒頭の「解説」で、史学史における田口の立場について次のように書いている。「明治史学史の上に於いて特に注意すべき事は、先生が終始民間の学者として立ち、その

卓識とその熱心とを以て、よく官学に対立し、遂に史学を以て民間の学問とし、一般に之を普及せしめられた点にある」と(Ⅰの二三ページ)。

\* 本稿でわたくしは田口の自由主義経済思想と経済史の研究にはたちいるいとまがないが、のちにかれの弟子たち、内田銀蔵、福田徳三らは経済史学派を形成した。

\*\* 国史学派は個々のメンバーは別として、時代がすすむとともに、全体としては天皇制政府と支配階級を代弁するようになり、やがて黒板勝美の退官したあと、東京帝国国史学科教授平泉澄が「ファッショ的な日本精神—皇道精神の史観」を掲げて登場する道を開いた。

卯吉の社会での活動は、やがて東京株式取引所の肝煎(きまいり)(今日の理事)や、東京銀行の顧問をつとめたり、また両毛(のちの上野と下野をいう)鉄道や花岡鉦山に資本家としてかかわり、あるいは衆議院議員(帝国財政革新会(解党して進歩党に加入)をつとめるなど、広く実業界・政治界にも及んだ。そしてほぼ明治二十年頃から、かれは、若い頃の急進的な面をもった当時の初期ブルジョアジーの立場から、産業資本の確立に向かうブルジョアジーのイデオログへと変質していった。そして晩年、日露戦争の風雲急を告げる頃には主戦論者としてふるまうにいたった。伊豆公夫のいうように、「およそ三十年間のかれの活動は、資本主義の基礎がまだ確立されていない時期にはじまり、産業資本が確立し、さらに帝国主義の段階へ突入しようとする時期に終わったのである。」

かれには、『自由貿易日本経済論』『経済策』『条約改正論』『時勢論』『帝国財政意見』、また『日本開化小史』『支那開化小史』『日本開化の性質』『古代の研究』など数多くの著作がある。また『国史大系』『群書類従』等々の編集刊行にも参画した。この事業のなかでかれは国史学派との結びつきを深めた。

さて、田口の名を早くも大いに世に高めたのは、弱冠二十代の著作『日本開化小史』であり、これは、その



主題からいっても、本書のこの冒頭の章でやや詳しくとりあげる必要があるだろう。黑板勝美の前記「解説」から再度引用しよう。「先生は歴史を、否、特に我が国の歴史を、新しい目を以て見直し、自由に考察し、活発に論述し、之を社会民衆の間に普及せしめられた。ここに於て、一時欧州の文明に眩惑し、学問といへば、西洋のそれに限られたかの様に思つてゐた国民の間に、祖国の歴史に対する興味と知識とがよび起され、而してその歴史をかへりみ來つた所から、国民的自覚が生じ、自主的に西洋の文明を批判し、その長を採つて我が長と併せ、一箇の新なる文明を我等の力によって生み出そうという氣運が生じて來たのであつて、この国民的自覚に就いては、先生の貢献が与つて大いに力のあつた事と思はれるのである」(Iの二四ページ)。

以下、若干煩にわたるかもしれないが、田口のこの著作の評価のために、史学史上における二、三の関連の發言を顧みておきたい。

まず、田口卯吉の没後、その再版(大正六年)のさいに、官学的国学派にぞくする斯界の代表者三上參次が、冒頭の「序」のなかでこの著作の意義について述べているところを聞こう。「博士の本領は経済学に在りしは言ふを要せず。然れども其の才氣の縦横なると、趣味の多方面なるとは、博士をして指を史学にも染めしめしが、其の研鑽は頗る精密、其の識見は最も高邁にして、鬱然として斯学の大家となり、新井白石、頼山陽に続きての史家とも称せられぬ。日本開化小史は原因結果の理法に基きて、我が邦の変遷を記せるものにして、叙述の体裁西洋の史学研究法に合ひ、斯界に一の生面を開かれたるものなり。經史〔經学と史学〕相俟つと云へる歴史の旧式を脱して、所謂文明史流の歴史を試みられたるものなり」(IIの四ページ)と。三上參次は、しかしここで、田口の進歩的な側面には触れていない。

また、黑板勝美は同書の「序言」で次のようにいう。「故田口博士の本領が政治經濟の方面にありて、一世の具瞻たすけし〔ともにみて〕景仰する所たりしは今こゝに論ぜず。然れども明治文化史に燦然たる光輝を放てる博

士の功績は、よし忙中の閑日月博士の余業たりしものとすも、この史学上に於ける努力と奮闘とに帰せざるべからず。」「日本開化小史を読むものは誰しも新井白石の読史余論折たく柴の記などを想ひ起すならむ。学者にして政治家たり経済家たり、はた文学の才ありて種々の方面に卓見の観らるべきもの、江戸時代にありては白石実にその第一人たり、而してその天下後世を益する最も多きものは我が史学に関する述作なりき。……しかも田口博士何ぞ白石と相似たるところ多きや、政治家にして経済家たること相似たり。文学者にして歴史家たること相似たり、平易流暢の筆を以てよく言はんと欲すところを曲尽する手腕また最も相似たり。たゞ白石の学問は漢学に根柢を有し、僅に蘭人によつて西洋の文明を覗きしのみなるに、田口博士の学問は、西洋の学術に基礎を置き、之に和漢の学を加へしところ、博士の博士たる所以なり、而して博士がその佐藤一斎の直系を受けられたるより察するも、その漢学に於ける素養のまた甚だ深かりしを知るに足るべし。日本開化小史は明治時代に於ける史学界の曉鐘とも開拓使とも称すべきものなり。その論ずるところ、或は多少の闕陥(欠陥)あらむ、また〔往時〕史学の研究未だ十分ならざりしものあらむ、然れども我が史学界に革新の空氣を齎(もたら)し來り、我が学者をして覚醒せしめたる功績は、正に本書を措いて他に求むること能はざるなり。」「回顧すれば本書の第一巻が始めて世に公にせられたるは実に明治十年二月西南戦争の正に勃発せし折柄〔正しくは終了した時点〕なりき、西南戦争と日本開化小史何ぞそれ対照の奇なるや、一は旧文明の最後を彩りしものにして、一は新文明を樹立すべき使命を有せしものたり、而して進歩と自由とが、政治に於て、はた経済論に於て、常に博士の標識たりしとはいへ、その自由進歩主義は決して欧米のそれにあらず、日本の自由進歩主義にして、よく我が国の特長を知つての自由進歩主義たりしは本書之を証して余りあり」(Ⅱの五七七ページ)と。

\* また、小沢栄一は『近代日本史学史の研究 明治篇』で、重要な指摘をしている。すなわち、『日本開化小史』は「日本歴史の叙述の性格を一変させたすぐれた歴史叙述である」とし、啓蒙的文明史としてのそのすぐれた所以を次の

ように述べている。それは「歴史」に対する態度・立場の斬新さと、啓蒙的文明史流儀の歴史観があざやかに顯示された新たな歴史叙述の類型がここに最初の出現をみせた、ということにはほかならなかった。すなわち、旧態の儒教的歴史の特質でもあった社会から遊離した個人の恣意や言動や徳性やによって歴史の変異を説明するといったような、いはば偶然性による歴史理解をきびしく拒否し、人間理性の憧憬にもとづく自然科学的合理主義的認識重視の影響下にあった啓蒙期認識論の歴史観への反映があって、その反映のしかたともいべき合理的因果関係による歴史叙述を志向した、ということが、ほかならぬ啓蒙的文明史の特質を形成していた、ということなのである」と書いている。

さらに伊豆公夫は、『日本史学史』で、国史学派の三上参次や黒板勝美が田口卯吉を自分らの側の大先輩として描くことにたいし批判しながら、次のように書いている。「思うに『日本開化小史』が史学的傑作であるゆえんは、明治維新以後の動と反動が渦巻いた社会情勢を如実に反映し、初期ブルジョアジーの批判的な態度によって貫徹され、方法的には唯物論の徹底があったからである。もしそれに瑕疵があるとすれば、当時の情勢をも反映した彼の出自(旧幕臣の家に生まれた)にも関係して、なお封建的なものとの競争があった点である。もちろん当時はすでに労働者農民大衆が民主主義運動へ相当有力に参加しており、本来の進歩的な立場はその側にあったから、当然その観点が進歩性のためには要求されるのである。しかしそれはブルジョア選手の彼には問題ではなかった。また、我々も、それを評価の基準に入れつつも、ブルジョア歴史家たる彼に過大な要求はしない。そしてその進歩的な部面を發展せしめ、反動的な部面を克服して来たという意味において、真の継承者は国史学派にあらずして、後の唯物史観論者であるということを確認をもって断言できるであろう。」<sup>(5)</sup>

以上、史学史における『日本開化小史』についての諸家の見解を顧みたが、以下、この著作の内容に入ることとする。



## 2 『日本開化小史』の特徴

『日本開化小史』における歴史叙述の具体的な諸論点に入る前に、本書の特徴をみておこう。二点がある。一つは、本書が史論体、しかも開化史体の書であること、もう一つは、全体を通ずるかれの史観についてである。

## (1) 史論体、開化史体の書であること

『日本開化小史』は、田口が多忙のなかで小暇を見出しては執筆をつづけ、明治十年から逐次分冊として発表し、十五年に完結したものである。卯吉はその第一冊の出版に当たって「自序」を書き、日本の歴史を考察するにあたって何に努力したかについて次のように語っている。

有裂眦反脣言語激烈、動作蕩々、如沸者。見之者曰、彼怒矣。有開顏解頤言笑温和、舉止揚々、如舞者。見之者曰、彼喜矣。是亦可也。然尚有未盡焉。夫人非無因而怒者。又非無緣而喜者。則見喜怒之狀態、而求其因緣(因果の理)。以評其心之喜怒、庶幾無誤矣。歴史者古來之評也。古來非一世、世々非一人、治亂之形勢、雜沓續紛、若不能分折之、未必能免皮膚之見(表面的な誤解)也。故史家之苦辛、不在於蒐集、歷代許多之狀態、而在於究盡其狀態之所本也已。余記此書、其可悉者務詳之、其可畧者務省之、以期得<sub>レ</sub>其情(実情)。雖然、是原公事之餘、偷<sub>レ</sub>少暇而成者、況余之淺學寡聞、安保<sub>レ</sub>其評喜怒之無<sub>レ</sub>誤耶。

かれがここでいわんとするのは、次のことである。ひとは事に臨んで喜び、また怒る。もとよりこれは理由あつてのことである。歴史にたいしてもわれわれは、その因つて来るところを探らなければならない。分析をしなければならぬ。もしそうしなければ、表面的な理解にとどまるであろう。本書の執筆するにあつて苦心したのも、歴史上に現われるさまざま状況、事態にたいして、その本づく所以を究めようとしたところにある、と。すなわち、歴史は論でなければならぬ。では、本書では、どのような論であるのか。

歴史叙述の仕方について田口が所見を述べたものとして、十年ほどのちの「歴史概論」と題する小論文『東京経済雑誌』明治二十一年八月十一日発行、所収がある。

かれは、歴史記述には、編年体、紀事体、史論体の三つがあるという。(1) 編年体というのは、種々の事件を年月によって区分し、一処ひとところに記載したもので、多数の事件を伝えるという利点はあるが、條理・論理に欠けていて、あたかも脈絡のない談話のようなものである(わが国の歴史書でも、『六国史』以下近代の史にいたるまでこの弊を免れていない)。(2) 紀事体は、個人の言行を記すものであつて、巧拙はあるが、欠点のある典籍というわけではない(わが国では、『栄華物語』『源平盛衰記』などがこれに入る)。(3) 編年体や紀事体のうちに思想を小さく狭めせばこんでならないとして、これらとは別に史論を作り、社会全体に渉るような事件を論ずる体が生まれた。これが史論体である。

ところが、史論体には二種の別がある。第一は、正閏曲直の標準を立てて史上の事件を論議する体であり、第二は、議論を交えずにたんに事件と事件との関係を説明する体をいう。前者は、たとえば、南北朝の正閏論や、神功を天子とするのはよろしくないという論などで、この論は著者の意見であつて史上の事件ではない。たしかにこれは真の史論と称しうる。しかし、この議論には別に一種の体が胚胎しており、たとえば、白石の『読史余論』や山陽の『日本外史』中にみられる史論のごときである。もちろん、その文中に著者の議論にぞ

くするところもあるだろうが、全体としていえば、そうした史論は、あえて正とか偏とか、曲とか直とかいうのではなくて、たんにしかじかの事件があったがゆえに、云々の事件が起きたというにすぎないのである。たとえば『日本外史』の初めに、「我朝之初、政体簡易、文武一途、舉海内皆兵」とあるが、これは事実であって決して議論ではない。『古事記』や『日本書紀』にはべつにそう記しておらなくても、必ずそのような事実ればならないことがある。その他、源平二氏の起るまでの顛末の記載についても、いかにもそのような事実があったにちがいない。我が朝で唐の制度を模倣してから云々の結果が世に顕われたということを記すのも、決して議論ではない。著者の意見である。これが史論体の第二種である。

以上の区別を述べたうえで、田口はいう、「真正の史体は所謂史論体」である。「社会全体に関する事件、譬へば政治の興廢、社会の組織の変遷等に至りては編年体にも紀事体にも談話すべからず、必ず史論体なるべし。」そして「余輩は歴史の記法に於ては世に所謂史論体の第二種を執るなり」とする(1の514ページ)。田口はさらにすすんで、社会の史は開化の史であるとする。かれによれば、開化とはとくに文運のすすんだ時代のみを称するものではなくて、どんな野蛮時代にもそれなりに開化はある。それゆえ「社会全体に涉れる事件と事件との關係を説明したもの」、つまり「社会全体に涉れる事件に関して原因と結果とを照合して記せるもの」が、開化史である。そして、「開化史体を以て史体の最も進歩せるものと云はざるべからず」(同五七ページ)と田口はいう。

## (2) 史観の特徴

本書を特徴づける史観として、とりあえず、まず次の三点をあげることができる。

### ① 唯物論的な傾向

この傾向は、著作のごく初めの箇所ですぐも鮮明に述べられる。「凡そ人心のスエメンタル・ライフ文野は、貨財〔財貨〕を得るの難易と相俟あいまて離れざるものならん。貨財に富みて人心野なるの地なく、人心文にして貨財に乏しきの國なし、其割合常に平均を保てる事、蓋し文運の総ての有様に涉りて異例なかるべし。」とはいえ、かれにとつて、財貨〔物質的な生産の成果〕の獲得と人心〔人間の表象・觀念〕との關係は、たんに相即的とか平行的とかいうのではない。次にみるように、田口が、人心、つまり意識、觀念、表象の有様ありさまを財貨、貨財の取得の難易からとらえる視点をとっていることにまず注意したい。これは、かれが経済学者であるからとくにできたのであるが、ここにはとくにバックルの『英国文明史』の影響が顕著であるとはいえ、これまで、このような視点をわが国の歴史研究のなかで基本的に提起したものはいなかった。さきの引用につづけてかれはいう、「抑も人間の初代〔原始的な時代〕に当あたりてや、器械〔まずは道具、生活用具、生産用具〕を用ふるの智未だ発すべからず、製作の技未だ熟すべからず、所謂天造の〔天然の〕果実葉根を集めて其食物と爲し、草葉樹皮を綴りて其衣服を造る外手段なかるべし。……故に人間の初代に於ては、唯だ衣食を得んとの念其全脳に満ちて、毫も其心を他事に働かしめず、……衣食はれ急なり、豈あに死後の事を憂ふるの暇あらんや、故に靈魂不死の説未だ発せざるなり」靈魂不死はもとより、いわんや神の表象もまだ生まれていない。むろん政治などもない。支配者もない。みかどみかども何もあつたものではない。やがて時を経て、ようやく、「耕作養蚕の道を知り、種々の貨物を使用する事を解し、朋友兄弟林中に相会して、時に或は遊戯の催しあるに及んで、人心の外物に接すること多く、其感觸を受くる亦た少からざれば、其想像は唯に靈魂の事黄泉の事に止まらずして、夫かの死を避くるの〔おのが生を保とうとの〕天性より、不慮〔思ひがけなくおこる〕の厄難を避けんとの心起れり。是時の人間未だ道理を窮むるの知なく且つ経験なければ、何事も皆な不慮ならざるはなし。総て外物の変化に注目して、其意外なるに驚き〔驚異をいただき〕、皆是れ〔何らか人力じんりきをこえる不可解、不可思議な〕怪力の致す処と定め、悚然しよくとし



て恐るゝ〔恐怖する〕の心なくんばあらず、而して人間交際〔ドイツ・イデオロギー〕にいう人々相互のあいだの往來、交通、交往、Verkehr〕に於ても、敬すれば人其怒を解くを以て、此〔人力をこえる〕怪力も亦た敬すれば、災を下さざるべしと思ひ、漸く之を敬するの事起れり、然れども未だ祖先を尊ぶの様子あるを見ざるなり」(IIの八一〇ページ)。このように物質的生活と生産との漸次的な進歩のうえに表象・觀念の発生と進歩をかはるは考え、そのうえで物心の相互的な作用を説くのである(ただし、田口には生産への視点がまだ必ずしも十分とはいえない)。

\* 他にも、かれが財貨の獲得と人心との關係を相互的に書いている場合もある。たとえば、「財貨の有様進歩するや、人心の内部同時に進歩す。人心の内部進まずして財貨の有様独り進むを得ず、財貨の有様退かずして人心独り退くを得ず、何となれば智力を發達せしむるものは財貨にして、財貨を蓄殖せしむるもの人心なればなり」(IIの八三ページ)。もちろん当然両者は相互的な關係をもつてはいる。しかし、田口はその場合にも基本的には財貨の方を前提としていると思われる。ただしばはそのことの鮮明な指摘を欠く場合もあるようである。

\* \* 田口における歴史の進歩をうながす力としての財貨(貨財)の把握は次のようなバックルの見解から大きな影響を受けていることを指摘しておこう。バックルは『英国文明史』(土井光華・養生奉三訳)第二篇の冒頭でいう。「人間ノ最モ厳シク、最モ烈シク、感觸引誘ヲ受クル所ノ、身外事物ヲ推究スルニ、即チ四箇ノ種別アリ、何ソヤ氣候食物地質及ヒ天造(天然)ノ光景是レナリ。」そして、「氣候・食物・地質ノ三者ニ由テ、人民ノ間ニ發生スル所ノ効驗(効果)ニ就テ、之ヲ論セハ、財貨ノ増殖ヲ以テ最モ先トス、何トナレハ、富ハ社会ニ於テ多クノ関涉ヲ為セハナリ、蓋シ發達開智ハ財貨ノ増殖ヲ勸ルモノト雖モ始メテ此國ヲ編成スルニ当テハ先ツ富ヲ以テ智識ノ前ニ置カサルヘカラス、各人各個貧窮ニ驅馳セラレ、衣食ニ奔走スル間ハ固ヨリ高尚ノ事業ヲ經營スルノ余暇ヲ得ス、又其希望ヲ發動セサルナリ、又況ンヤ学芸修習ノ事ニ於テヲヤ、但シ野蛮人民ノ才力ニ適当シタル所ノ、粗且ツ鄙陋ナル器具ヲ製造シ、以テ日用ノ不使ヲ補フニ過キサルナリ。」「人間社会ノ景況、此地位ニ在ル時ハ財貨ノ増殖ヲ以テ第一急務ト為サ、ル可ラス、何トナレ

ハ、貨財ナケレハ、余暇ヲ得ル能ハス、余暇ナケレハ、学芸ヲ習練スル事能ハサレハナリ、若シ、人民ヲシテ……其ノ得ル所、其費ス所ヨリ大ナラシメハ、必ズ余零(少しばかりの余り)ヲ生スヘシ、其余零ハ、則普通ノ理ニ由テ自カラ増殖累積シテ、遂ニ耕織セサルノ民ヲ支養スル所ノ財本トナルヘシ。是ニ至テ始メテ智慧ヲ練磨スルノ徒ヲ出シ、昔者(むかし)衣食ニ貧シク、生計ニ忙シク、學術研究ノ閑暇ヲ得サリシ徒モ、今者(いま)此財本ノ為ニ之ニ身ヲ委託スルノ日月ヲ得レハナリ、以下略。スペンサーのこの思想が田口に大きな示唆を与えたのはいうまでもない。

以下重要な文章がつづくが、田口の史観の唯物論的な傾向はいまはこれで一応理解されうるとして、この問題については本文の叙述内容についてのたちいった考察のさいにあらためて再度触れることにしよう。——田口にみられるこの唯物論的傾向は、しかしまだ今日のいみでの唯物史観とはいえない点についても後述したい。

\* 田口は戦国時代における支配階級のあいだの抗争や、江戸時代の封建制度のもとでの身分性・階級性のきびしい差別にも着眼している。すなわち、かれは先立つ社会の階級関係の存在については一定の認識を示している。

## ② 社会・歴史の進歩という視点

バックル、スペンサー、ギゾーの影響のもとでもいえようが、社会、歴史の進歩という視点は、田口にとつて基本的なものである(もちろん停滞ということもかれは当然みとめている)。そしてかれは、社会の進歩・発達をば生物の成長・発達との類推によって考えようとしている(もちろん、このことは、前者を後者に帰着して社会を生物学的に考えるという意味ではない)。田口は、生物や社会の育成についてであるが、次のように書く、「社会の発達<sup>①</sup>は他の有機諸物の発達と異ならず、今草木に就きて之を例せん。抑々草木の性たる、又保生避死の天性を存するがために、其生長するや疑ふべからずと雖も、之を養ふに種々の方法を以てせば、以て堅韌ならしむべく、以て柔弱ならしむべく、以て長大ならしむべく、以て矮小ならしむべし。之と同じく社会開化の発達するは社会の性なりと雖も、之を養ふに王朝の制度を以てすると、鎌倉政府の制度を以てすると、

徳川政府の制度を以てするとに因りて、文学貨財より風俗人情に至るまで、皆異様な稟性を得せしめたり（社会の制度によってそこにおける文運の成長・発達に相異が出てくる）。是に由りて之を観るに、社会の制度を立つるものは、恰も園丁の草木を育つるが如き歟。嗚呼如何なる有様に於て草木最も長ずるやを知らば、社会発達の如何なる制度の下に於て最も速なるやを知ることまた難からざるべし」（Ⅱの一〇六ページ）。もっとも、かれはここで、社会の制度を、歴史的な発展によるのではなく、あたかも人間が自分で選択しうるものであるかのように考えているといえよう。

田口は進歩にも分量と性質との区別があることを指摘している。今日の用語では、量と質といった方がよいかもしれない。ともあれ、かれはこのようなカテゴリーを使って文化の進歩を分析していることに注意したい。「進歩の順序を説かん。夫れ物の進歩に性質と分量との二種あり。譬へば分量の進歩を云へば古の人は衣一襲（ひとかさね）〔食は〕一菜にして、家屋家財の数も少かりしに、今は衣数襲食三菜、家屋家財の数も極めて多きに至りしは分量の進歩なり。又た性質〔質〕の進歩に就て云へば、古の衣は織方も粗末にして糸も太く、食は舂方も疎にして料理も下手に、家根は萱葺にして柱は丸木なりしが、今の衣は織方も精密にして糸も揃ひ、食は舂方も精しく料理も上手に、家根は瓦葺にして、柱の削りも滑かになると云ふが如きは性質〔質〕の進歩なり。（また貧富について次のような考察をしている）大凡そ社会の進歩せる時とても貧者もあり富者もあることなれば、古のものを悉く劣れり、今の物悉く勝れりとは云ひ難し、古は貧者の需要に応ずべき衣を織出す事も知らざりしを、今は廉に〔安く〕之を織出すの術をも発明したれば、古の上と今の下とを比較せば、素より優劣を異にするものあらん、只だ古の貧者と今の貧者と其快樂の度如何、古の富者と今の富者と何れが需要を満すの便ありと云はば、自から世運進歩の理を知るを得べし（このように、さまざまな尺度をたてて、質のうえでの進歩を考えなければならない）」（Ⅱの八三ページ）。

小沢栄一も、このような点について、社会、歴史を個々の人物・事件あるいは英雄の行為としてではなく、全体として捉え、その進歩を明らかにする態度は、『日本開化小史』を一貫するものであり、この点で、福沢諭吉の『『文明論の概略』』とともに、『歴史』の対象が『人民』『社会』『人心』にひろがり、歴史認識の目標を『進歩』の意識にとらえることが、まず啓蒙期文明開化史の第一の特徴であることが確認される」と書いている。これは重要な指摘であると思う。

### ③ 社会・歴史の理という視点

バックルやギゾーのいう、歴史の理、歴史上の事件相互の因果的な関連の見地に、田口は同意している。バックルは『英国文明史』でいう、自然界の変化は不定で端倪すべからざるものであるけれども、ケプラーやニュートンらの努力によってそこに一定の法則のあることが見出されたが、それでは人間社会についてはどうかというところ、人事の変化何如に定限なしと雖も、果て能く是の如きの「堅忍不拔の」勉強を以て、是の如きの穿鑿をなせば、豈同一の成功を為し得べからざらんや、「今古史家に於て、未だ（変化混雑のなかに一定の法則を発見せんと）此期望の一般に行われざるは、一は其能力が遠く物理学者に及ばざると、一は人事の現象は、他の物理より復かに混淆錯雑せるに由れり（つまり研究対象自体の複雑さのためでもある）」と云わざるべからず」と。またギゾーは歴史における精神的事実や一般的事実も研究対象とすべき現実であるとして、次のようにいう、文明は他の事実と同様に一つの事実であり、研究し、叙述し、物語ることのできる事実である点で変わりはない。だが、この場合、事実というとき、戦闘や戦争や政府の公文書などのように、物質的な、眼でみることでできる事実のほかに、これに劣らず現実的であるところの、精神的な、眼に見えない事実がある。また、固有名詞をもつ個人的事実のほかに、名前のない一般的事実があり、後者にたいしては精確な日附を確定することもできず、眼にみえる事実の限界内に閉じこめることもできないが、これも事実であって、歴史から除外するこ



とはできない。さらにまた「歴史の哲学的部分と呼び慣はされてゐるもの、即ち事件の相関関係、事件を結び合せている紐帯、事件の原因及び結果、これらは事実であり、歴史に属するものであって、「事実」という点では」戦闘や眼に見える事件と全く同じ」である。「これらは歴史の根本部分を成すものであり」、文明とその進歩、発展をこのような事実として捉えなければならぬ<sup>8)</sup>。これは歴史研究にとつての重要な指摘であるといえよう。

田口は、バックル、ギゾーラのこのような視点を受けいれながら、しかしたんにそれを模倣して同じように日本史における進歩、発展をたどつてみたのではなく、このような斬新な史観に学びながら、日本の歴史の、大きな意味の進歩、発展、諸事実の複雑な転変、推移のうちにその理を探るといふ視点を、かれ自身のものとしてとつていふことができると思う。自国の歴史にたちもどつて、諸事件の複雑な連鎖のなかに、その諸事実の多様な推移のなかに、かれはそれぞれに固有な理由、相互の連関を探るのである。このような姿勢をもって、かれは自国の開化の歴史に科学的視点をもつてたちむかったのである。

\* 天台僧慈円は、一三世紀の二十年代に『愚管抄』を著わした。この著作の一つの重要な特徴は、歴史の推移のなかに「道理」を探ろうとしている点であつたといえよう。当時多くの人がとよつて道理という語はしばしば使われていたが、かれは、それを著作の中心理念とすることによつて、日本における歴史考察のうえに新しい局面をもたらしたのであつた。これはある意味で田口の著作に先駆するものであるといえるかもしれない。しかし、慈円と田口とを結ぶ線は、もし引くことができるとしても、それほど太くしるすことはむづかしいであらう。そもそも、慈円にとつて道理とは何を意味するか、これをわれわれが明確に理解しようとするにただちに困難が生じる。この語は、使われる場所によつてあまりにも多義的になつてゐる。かれには、これを明確にしよつとの意図が欠けており、合理的・科学的な概念とみることはできない。この点にかんし、わたくしは『日本思想史序説』の第六章の三「『愚管抄』と道理の哲学」で詳しく

述べたので、参照していただければ幸である。わたくしはそのなかで結論的に次のように書いた。「慈円の道理の哲学のもつ観念論的・非合理主義的・神秘主義的な性格の根底には、台密的教學と神秘的な体系との癒着がある、ということができよう。たしかに、慈円において、仏教思想を背後におきながら、道理による歴史考察という哲学的な問題を提起した点で、わが国の歴史思想のなかに重要な局面をきりひらいたといえようが、道理概念が多義的で難多な意味をもつとともに、右の欠陥のために、その基本的な視点は批判性・変革性を欠いた保守的・現実肯定的なものになっている。」

#### 付論 功利主義的倫理説

なお、田口が歴史の考察に、スベンサー流の、功利主義的・進化論的な倫理の視点を導入していることを付言しておく。『開化小史』第三章の初めで、人間はもと善悪邪正を識別する心を発しなかったが、保生避死を天性とするため、「そこから」心の快と悶「不快といってもよいだろう——筆者」の感覚も生じたが、なお久しく、私利を計る心がきわめて強くて、他人を喜ばせることが善く、怒らせるのは悪いということを知らなかった。しかし、かれはいう、「経験次第に進むに及んで、其私利を計る亦大なり、衣服飲食も美ならんことを願ひ、父母兄弟も恙つつがなからんことを願ひ、親族朋友より見も知らぬ他人までも、耳目に触るる所には浅ましき有様に至らしめざらん事を願ひ、極めて憐あわれなる有様を見るときは、自ら損失するも之を救はざるを得ざるに至ることなり、是れ己の損失を憂ひざるにあらざれども、見し有様の其心を悩ましむる事は、其損失より大なればなり。是れ倫理の情の起源なり。孟子曰く、『人皆な人に忍びざるの心あり、今ま人乍たまたまち孺子の將に井に入らんとするを見るときは、皆な怵じつて慄慄の心あり、以て誉を孺子の父母に内たくふ所に非る也、以て誉を郷党朋友に要もとむる所に非る也』と。」

そして田口は、このことをも、私利心から、すなわち私利心の成長から説明しようとする。「抑も人に忍びざるの心とは、憐れなる状態を見るを嫌ふの私利心なり、親族に美服を着せしめんと欲するは、自ら飾らんと

欲する心と同一ならずや。」そして、この点で、自分の見解がH・スペンサーからくるものであることを次のように述べている。「ヘルベルト・スペンサー氏曰く、『倫理の情は度々の経験を積んで変性せる私利心なり、蓋し経験を以て其心を懲戒せしむるときは、其神経の構造を変性せしめ之を其子に遺伝し、子亦之に経験を加へ其性を變せしめ其孫に遺伝し、子々孫々如此くかくのごとにして、終に経験より来らざる一箇独立の稟性稟性〔天性〕の如く見ゆるに至り、一人の私利心の経験に基かざるが如き念と成れり。』と」(Ⅱの二四―二五ページ)。

\* スペンサーのこの見解にたいし、J・ルッポックは反論して、父祖の経験がその性となって子孫に遺伝しその勢が積重なることは認めるが、それによって正善と私利のような大きな相違は弁明しがたいとし、正善の考えは遺伝の性よりもむしろ幼時の教育に基く点が多く、それゆえ、教則が正善の起源であり私利はこれを計る尺度である、とする。しかし、田口はスペンサーを支持して次のようにいう、「人類の脳裏、豈に二種の相容相容るべからざるが如き心あらんや、皆な私利心の成長して其枝葉を広めしめしが為めに、枝葉の内に相抵ていご悟くわい（くいちがう）するもの発するなり、然れども其の本源に至りては、素より一根より出でずんばならず。之を要するに倫理の情は私利心の枝葉なり、善悪邪正の考は世人の評判（批判による是非の判定を得て而して後に発するものなり）（同、二六ページ）と。

田口は、この第三章の冒頭にあるのと同じ文章を、『共存雑誌』（第六一号、明治十三年）に「倫理の情」と題してあらためて掲載している。大久保利謙がいうように、このことによっても、スペンサーの倫理説を援用したこの人性論は、当時の卯吉の思想とみることができらう（10）。かれはこのような功利主義的な倫理観のうえに立って、鎌倉期において倫理の情から忠義の気が発するにいたったこと等々を述べるが、本稿ではたちらない。

注

(1) 田口卯吉の生涯については、鹽島仁吉『鼎軒田口先生伝』一九二二年ほか、注(2)に掲げる伊豆公夫の論文、次にあ

げる田口卯吉全集の第一、第二巻それぞれの冒頭にある黒板勝美と福田徳三の解説などによる。伊藤整『日本文壇史』講談社文芸文庫2・3も参考になった。テキストとしては、主として『鼎軒田口卯吉全集』第一巻、一九二八年、第二巻、一九二七年による。同書からの引用のさいには、本文中にたとえば、Iの二三ページ、IIの五ページなどとして示した。そのさい、全集本では「解説」と本文に別々のページが付けてあるので、「解説」からの引用か、本文からの引用かは文中に示した。また、大正六年の再版本『日本開化小史』も使用した。

(2) 伊豆公夫「現代の歴史学」『新版日本史学史』校倉書房、一九七二年所収、三五―六、五二ページを参照。

(3) 同「『日本開化小史』における有産者性と封建制の競合」同上書、六八ページ。本稿はこの伊豆論文に多くを負っている。

(4) 小沢栄一「近代日本史学史の研究 明治篇」吉川弘文館、一九六八年、一九八ページ。

(5) 伊豆公夫、同上書、八八―九ページ。

(6) 伯克爾『英国文明史』土井光華・萱生奉三訳、第二篇、発兌書林、一八七九(明治十二)年、一一―四丁。

(7) 小沢栄一、前掲書、一九九ページ。

(8) 以上バックルとギゾーからの引用では、それぞれ和訳本を用いた。田口がこれらの訳文を読んだという意味ではない。

当時の知識人は和訳なしに自分で原文を読むことが出来た。わたくしのここでの引用は、伯克爾『英国文明史』(注6)を参照) 八一―九丁、F・ギゾー『ヨーロッパ文明史』上巻、中田精一訳、三邦出版社、一九四三年、二二―三ページによる。

(9) 拙著『日本思想史序説』新日本出版社、一九九一年、二五四―五五ページ。

(10) 『田口鼎軒集』大久保利謙篇、明治文学全集14、築摩書房、一九七七年、四四五―五ページ。

(付記) わたくしは目下、旧著『日本思想史序説』(一九九二年)および『日本近世思想史序説』(一九九七年)につづいて、『日本近代思想史序説』の執筆に着手している。五ページ十四行目の文は、本稿をその第一章中に収める予定で書いたものである。